

●我國美術の一般

文科四年

本田よしえ  
土肥長恵  
師岡ふみよ

十四

我が國は自然の美に於て世界に冠たるのみならず歴史的及技巧的美の方面に於ても亦他國に誇るに足る。抑々東洋の文華は遠く源を印度及支那に發したりと雖も彼等の國は人種的の競争政權の爭奪によりて革命争亂絶ゆる事なく従つて一革命一變亂の起る毎に嘗て一代の精氣を集めて天下の善美を盡したるものも忽ち彈烟硝霧と俱に散じて復た其の殘影をだに見るを得ず。然るに我が國は上に万世一系の皇室を戴き下には忠良なる大和民族世々烈聖洪仁の餘澤に沐して光輝ある歴史を形成し以て彼の國に發したる文物をも盡く齎し來りて今日まで保存せられたり。故に當年二國の文獻は現時の支那及印度に徴するを得ずして却て我が國に存する物に就きて其の一斑を窺ひ探究の資を求むることを得るなり。故に是點よりして我大日本帝國はただに世界の公園たるのみならず更らに東洋美術の寶庫なりと云ふも過言に在らざるなり。

さてかゝる光榮ある國に發生したる我が國美術は我が國特有の風土地勢等の外的情況及國民、國家の文化發達の勢力等に依りて發し成長せるものにて美術本來の約束たる一つの通性を具ふると同時に日本的の一種の調を現すに至りぬ。勿論其の特調は美術の種類作家の氣分或は流派等に依りて多少現れを異にすも雖も大躰に於て日本的の一種の調を日本美術に見出さざるを得ず。この點によりて日本美術は存在し其の體面を保持し併せて一切の批判長短の是に存するを知る。故に今より繪畫彫刻建築に就きて其の特調の概略の書によりて得たるところを紹介せんとす。

一、繪 畫。

(1) 描線を旨とす。即ち總ての物象を線をもて現す事は我國繪畫の一大特色にて線の運用如何によりて幾ど作品の巧拙さへ定まれる程なり。是れ元來支那の書畫一致の思想及主張によりて發達せる支那畫の系統を受けしものにて毛筆と墨とが其の掃灑の専料となりて此等又最も描線に適應せるなり。而して此の法の大に發達して妙域に達したるは我國人は先天的に手指の運用巧にて早くより筆墨の運用に熟練し筆には輕重疾徐偏正曲直の有様を寫し墨には濃淡晦顯遠近正側の區別を現はすに至れる結果とあらゆる物象を線の太細にて現し得るのみならず線其のものは有意的にて單に界として用ひたる種類を除きては其の一剛一柔一曲一直のうちに善く種々の感想をさへ示さるゝによるなり。

(2) 陰翳法の不分明なる事

先きののべし如く線は極めて複雑明瞭なるに反して陰翳の太だ簡單疎雜曖昧なるは日本畫に於ける描線法發達せしをもて陰翳として描かざるも優に其の面影を現し得るをもてなると線筆墨

の三者によりて幾分か陰翳の用を辨し得ると共に一方に於て十分内容を豊富たらしめしをもて單に翳影のみを現す法は古來一般畫家の注意を引かず幾ど技巧の一法とさへ認めざりき。次に日本畫は想を旨とし只管神韻の縹緲たらん事を希ひしをもて天然を其まゝに現はさん事は畫家の嫌ひしところなりき。更らに日本畫は想を尙びて實物を寫す事は比較的幼稚なりしをもて實物寫生に基ける陰翳法は比較的分明ならざりき。なほ此の理由としては日本畫は個物を現はすをさけて物の通有性を描かんとする傾ありしをもて或る物を殊る時と處とに選して特殊の相を精密にうつし以て個想の表現をなすをさけしをもて陰翳を施す必要を多く認めざりき。

(3) 遠近法分明正確を缺きし事。

遠近法は陰翳法に於ける如く輕視せられざりしと雖もさまで重大視せられざりき。即ち日本畫は藏蓄を尙びて露骨をさけ自然の雲烟縹緲の趣隱顯出沒の妙味を現はさんとせる主賓を區別せんために佛畫に見る如く主位の事物を殊更に大且つ明にせんつとむると全躰の調子の裝飾的なるとは駈つて遠近法に不注意ならしめしなり。なほ其の遠近正面側面等の法に於て往々誤り有るは結局當時の畫家が未だ科學的腦力の發達せざるに依るなり。

(4) 色彩は巧に調和せる間色よりなれる事

佛畫或はある裝飾的のものを除きては一般に清淡にて決して濃艶高度の色彩を用ゐざるに在り

之輕淡泥みなきを佳とする國民の好尚に投合したるものと云ふ可し。

(5) 餘韻を旨として含蓄の裕なるを上々とし爲め其の現れは極めて簡單なりし事。之洋畫に見る如く畫幀の全面あらゆる物象をかき又は物象の全部又は部分を精密に寫さんとするものとは全く其の趣を異にせり。かくあまりに氣韻を尙びしたため想化にすぎて一種奇怪なる感をあたふるものさへ有りき。

以上は主として外的方面に於ける特調なるが更に想の側より見る時は凡左の如し。

(1) 日本畫は一種裝飾的の意匠に富む事。

古來日本の畫家印度及支那的思想に感せられ想化し風致有らん事をつとめし結果構案意匠は自模型的となりしもの尠からずされども全躰に於て決して彼等の如く不自然的なるものに在らず。

(2) 想化普く行はれて含蓄饒なり

日本畫は一方に於て想化を尙びしたため或は抽象的形式的にて單なる模型なりと批評せらるゝ事往之有ると雖も然も其の作品の平和にて奥蘊圓滿安靜等の相を示せるは沒却す可からざる長所にて一見して其の真趣の解し得ざる等は含蓄に偏したる結果なるも之を觀る事久しくして言ひ難き深き趣味の存するを見出す可し。

(3) 個想美よりも類想美を多く現す傾向をもつ事。

即ち我が國の畫は個々の殊りし相を現すよりは寧ろ通性の表現の遙に勝れるを見る可し。

右は日本繪畫の西洋畫と殊る最甚しき點をあげたるのみなり。

## 二、彫刻。

(1) 上代。

我が國初に在りては彫刻として見る可きは殆どなく佛教渡來ととも漸く發達するに至りぬ。即ち當代のものは全く佛教の力によりて發達せしものにて其の品題の多くは佛教に關係して佛教的思想を示さざるはなく是等の佛像は大抵僧侶が深奥微妙なる教を或る形に現はし以て觀念の標的とせんが爲に或は嘗て實在せし功德ある人物に對して之を表彰し禮拜供養して以て其の功を傳へ報恩せんが爲めなり。故に自ら想化せられ神異靈妙の致ありて雄麗の致精巧の技自ら見る可し。

(2) 桓武天皇時代。

當時天台眞言等の宗派興りて佛僧の模範略々備はり殊に眞言の隆盛ととも儀軌を示せる佛像多く作られ莊嚴の作多く世に現れたり。

(3) 藤原氏時代。

當時は我國固有思想漸く勃興し從來の如く印度傳來の模型に習はんよりは寧ろ日本の優美なる相を現はさんとして多く貴人の相貌を參したるをもて其の極高雅優美のものとなれり。

(4) 鎌倉時代。

政治上に於ては武家か天下を一統して武門政治をなし、宗教にては禪宗入り來りて盛に上下に信仰せられしをもて是等の影響を受けて優健なるもの多く現はれ、奈良の大佛再興せられ同時に運慶湛慶等の各工出で、技術大に進み寫實的傾向を呈すにいたりぬ。然れども追々佛教の衰運にむかふにつれて彫刻も衰へ其の作物は多く纖巧繁褥となりて専ら裝飾を主眼として終には形式に拘泥して斬新なる作物を見る能はざるに至りぬ。

(5) 豊臣徳川氏時代。

當時は彫刻は一轉して専ら建築及裝飾に用ゐられ徳川氏の世に至りては全く變じて置物根付等の半工藝的のものとなりて從來とは異りたる發達を見るにいたりぬ。

## 三、建築。

我が國の建築は佛教の影響を受けて發したるものにて宗教上より見て之を別てば左の三となる可し。

(1) 神道建築。

佛教渡來以前の建築にて純日本式のものにて屋根破風等何れも直線よりなれるものなり。

(2) 奈良六宗及天台真言の建築。

佛教渡來以降藤原氏攝關時代末葉迄にて支那の隋唐の文物の輸入ととも日本化したる時代をも含むものなり。

(3) 禪宗以下各宗の建築。

宋朝以後の文物の影響をうけしもの及之が日本化せられし時代なり。

特 質。

(1) 材料は多く木材なりし事。

上代建築の材料として木材のみ用ゐられしは我が國が森林に富むと同時に氣候中正溫和にて寒暑風雨適度なるをも堅實なる障壁を特に設くるの必要を感せざりしと我が國人は清淨淡泊を好むをもて自清淨なる木材を愛用せしなり。

(2) 木材を専用したる結果運用の術大に發達し設置安挑等精緻巧妙を極めし事。

(3) 外部は簡單質素なる事。

色彩を施すに當りても只圓を塗りしのみ華なる多くの色を用ひる事なかりき。

(4) 内部の裝飾は比較的複雑華麗なりし事。

外部は極めて簡易なるに反し内部は即ち壁には金箔を押し金銀の砂子をまき彩色書をるがき柱長押には漆を塗り蒔繪螺鈿を施し欄間扇の類に彫刻等を施したるなど裝飾の妙を盡したるあり。然れども一方に於ては隱逸閑寂なる天然の林泉に對し之に相應せしめんために得易き材を用ゐて小屋を作り、何等の技巧をも加へしすて其の間に一種幽玄淡雅の致を帶びしめたるもあり。前者は専ら寺宮殿に見るところにて後者は茶屋的建築に見る可し。

(5) 其の趣閑雅の致多き事。

(6) 規模比較的宏大ならざる事。

大牀に於て宏壯雄大なる理想精神を現はせしものは尠く副位的の建築物を全くはなれて一箇獨立して宏大なるものに乏し。これ一つは島國的國民にて企圖心の欲之せしと優美閑雅なる規模小さき山川の景色には宏大なる建築は適應せざるをもてにては古來より座禮を主としたるをもて服裝調度建築の諸制自ら之に適應せる發達をなしたるなり。加ふるに我が大和民族は汚濁をいむ風盛にて天皇御一代毎に遷都せられしをもて餘りに宏大なる建築は不便なるをもて比較的小規模のものゝみ生せしにて且つ歴史を通じて行はれし階級制度のため住居等につきても相應の制限をあたへられしをもて従つて大規模の建築をなすあたはざりき。

右の事情は何れも我國建築をして大ならしめざりしなり。(完)